
何がどうなってこうなった？

缶詰め

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

1話・何でもない日常（前書き）

始めまして。缶詰めです。小説自体書くの初めてでちょっとたどたどしい部分があると思いますが、楽しんでいただけたらなと思います^^。これからよろしくお願いします。

1話・何でもない日常

俺は今大学に進学してもう20歳になる。名前は柳 浩介（やなぎ こうすけ）だ。背格好は中肉中背の身長170cmのどこにでもいそうな学生だ。趣味はスポーツだとか健全な趣味を持ち合わせていない。強いて言うなら漫画を読むことと動物を愛でることぐらいか？特に大学は入りたくて入ったわけではない。親が裕福でお金に余裕があるのか大学に入れとゴリ押ししていたので流れで入ってしまった。特にやりたいこともなく毎日を過ごしているのだが・・・まあ、紹介としてはこんなものだろうか。

今俺は大学から帰っているところだが目の前の電車の線路の上で犬が立っている。よく見ると線路に足を挟めてしまったみたいだ。電車のサイレンはもう鳴っている。

間に合うかと、思いつつ急いで助けに行った。周りからは悲鳴やらが聞こえてくるが今は周りのことは頭に入っただけだった。犬の足を外すことができたが、目の前にはもう電車が迫っていた。そこで俺の意識は途絶えた・・・。

1話・何でもない日常（後書き）

んー、最初としてはこんなものかな？^^・ご意見・ご感想、アド
バイス等ありましたらどしどし送ってください^^
次回からはコメディーでも入れてみようかな？と思いますので笑っ
ていただけたら幸いです^^

2話・え？こじこじ？（前書き）

とりあえず異世界に行くまで書こうかなと思いました。あとがきにキャラ対談を入れてみましたのでよければ見てください^^

2話・え？こじこじ？

目を覚ますと目の前は真っ暗だった。

「あれ？俺いつの間に寝てたんだ？しかも真っ暗……。真夜中だからか？はあつ、起きて損した……。もう一回寝よ。」

二度寝を決め込もうとした矢先に

「起きろコラア〜！」

「ゴフウツ！」

これはやばい！腹にかかどがめり込んでいる……。俺が悶絶している間に俺の腹にかかと落としを決め込んだ奴は

「なに、こんな所で二度寝決め込もうとしてんのよ！普通ここは、ここはどこだ！？とか言うもんでしょ！？」

「ゴホツ……。ここは、ここはどこだ？とかギャグか？……。まだ回復しきつてないのについ突っ込みをいれてしまった。

「あぁん！？何か言った！？」

「何でもございませぬ。」

勝てる気がしない……。

そろそろ腹も回復してきたし、相手の顔を拝んでおくか。相手は15歳前後の若干身長低めの少女といったところか。少女の前に美がつくかな？それぐらい綺麗だ。

「で、俺にかかと落としを決めてくれたあんたはなんなんだ？そしてここはどこだ？」

そろそろ本題に入らないと進まない気がしてならないのは俺だけか？「かかと落としは余計よ！っていうか、それを最初に言うべきでしょ……。」

まあ、確かにな。だが、起きたばかりだから仕方がないだろう。普通目が覚めて知らないところとか常識外れもいいところだ。

「で、ここはどこであんたは誰だ？」

「あ、そうだったわね。ここはそうねえ……。私が作った空間で

私は神様」

「は？」

「だから神様」

「そんな笑えない冗談はもう少し小さい時に言うんだな。」

「冗談じゃないわよ！小さい時って小さかったらこの冗談はありなの！？」

普通に考えてありえないだろう。

「それを聞いてすぐに信じれるやつには良い精神科医を紹介しよう。」

「だから冗談じゃないって言うてんでしょ！それにあなたは死んだんだからここに来てもおかしくないでしょう。」

「は？俺が死んだ？」

「おいおい、俺が死んだ？さっき腹にかかと落とし決められて悶絶してたじゃないか。死んだら痛みとかないんじゃないのか？」

「それこそ笑えんな。」

「どこまでかかと落としを引っ張るつもりよ！？相当根に持ってるわね……。」

「そりゃあ、かなり痛かったからね。」

「あんた電車の線路の上にいた犬を助けようとしたでしょ？その子を助けようとして轢かれたじゃない？それに痛みがあるのは死んで魂と一緒に体も持ってきたからよ。」

「俺が犬を助けた？・・・待てよ、確かにその記憶があるな。犬を助けようとして助けたはいいが、電車が目の前に迫ってきて確かそこで意識を失ったんだよな……。」

「思い出した。俺は犬を助けようとして電車に轢かれたんだな。じやあ、死んでいるのか……。ところで、その犬は？生きていますか？」

「ああ、その犬ね。その子は……。」

「流れるには俺が死んでその犬は助かっているんだろうな。」

「その子も死んじゃったわよ。」

「何！？普通助けた犬は生きて俺だけが死ぬんじゃないのか！？何だよ！？犬も死んじゃってんじゃん！意味なくない！？」

「そんな漫画や小説みたいなのが現実で起きるわけじゃないじゃん。いや、これも十分に漫画や小説みたいだぞ……。」

「ちなみに、犬もこっちにきてるわよ。」

「まじか！？」

「ほら、出ておいで。」

「ワンツ！」

出てきた。というかいきなり現れた……。

「ね、いるでしょ？」

「まあ、その辺は突っ込まないでおこう。で、俺と犬をここに呼んだ理由はなんだ？」

「お、早速きたわね。電車がすぐそこまで来ているのに犬を助ける勇気があるなんてすごいじゃない？そんな人が死ぬには惜しいから君には異世界へ飛んでってもらうの。あ、犬もね。」

「マジでか？」

「マジよ。しかも能力を色々つけてあげるわ。とりあえずあんたと犬には言語機能をつけてあげるわ。」

「犬にもつてことはこいつ喋れるようになるのか？」

「ああ、喋れるぞご主人。」

「うおわ！喋った！つかいつの間にもうやったのか？ていうかご主人？」

「気づかなかったでしょう？これぞ神様パワーよ！その犬あんたが助けてくれたからご主人って言ってるんじゃない？それと犬には一般人の知識を入れておいたから知識レベル的にはあんたと同等よ。マジか……。神様パワーすげえ。」

「あ、そうだ犬。あんた今なら姿勢好を変えられるけど何がいい？」

「そうだな。人間の空想に出てくるケルベロスというので頼む。」

ケルベロスって見た目めちやくちや獰猛っぽそうじゃねえか。

「そこのチョイスか。」

「いいわよ。あたしにまっかせなさい！」

と、神様が言った瞬間犬の周りが光で囲まれていき姿が見えなくなったと思ったら次第に光は消えていき、光が消える頃には今までの犬の面影が全くなく、全身黒の毛並みの正に想像上のケルベロスそのものだ。頭は1つだが・・・

「おお、ありがたい。」

「ちなみに人型にもなれるから向こうに行つたときにでも試してみなさい。」

「了解した。」

「じゃ、お次はあんたね。何がいいの？」

ふむ、そうだな・・・。

「まずは身体能力を向こうの世界での上位に入るぐらいに上げてくれ。それと、向こうでは何があるんだ？」

「そうねえ。まず人間がいて世界は戦国時代的な機械が全くなくて銃みたいな武器がなく、モンスターがゴロゴロしてて魔法が使えるあと、その世界にはこっちの世界とは違って獣人がいるから。だからその犬も人型になれるようにしたの。」

なるほど。まさに異世界って感じだな。

「すまぬが犬というのはやめてくれ。私の名前はケルベロスで頼む。」

「ケルベロスって長くね？略してケルビでよくな？」

「その略し方だといきなり弱く聞こえるわね・・・。某狩猟ゲームの鹿じゃない？」

「なっ！？あんなのと同じ名前だとこの姿の雄雄しさがなくなってしまう！それだけはやめてくれ！ご主人！せめてケルにしてくれ！」

「何でお前がケルビ知ってるんだよ・・・。だったら最初から言えよ。」

あ、いじけた。お座りして尻尾がへにやってる。意外とかわいいかも。顔は怖いけど・・・。

「だから一般人の知識があるって言うてるでしょ？それに加えあん

たのそういつた知識も入ってるから。」

「なんですと。じゃあ、俺がゲーム知識を出しても話が理解できるわけか。」

「んで、身体能力の向上と他は何？」

「そうそう。後は、魔法が何でも使えるようにするのと、魔力？でいいのか？それっぽいのをかなり上げてくれ。あとは漫画ででてくる技を使えるようにしてくれ。武術だけの。ブーチみたいなのはなしってことね。」

さすがにブリーチとかの技が使えるようになったらヤバイな。

「了解。んじゃ、そろそろ向こうに送るからがんばってねえ。」

「おいおい、いきなりかよ？」

「これでも長くいたほうでしょ？あんたが最初遊ぶから。」

俺のせいだよ……。っと地面が光ってきたな。これで送られるのか。っていうかケルの奴まだいじけてる。

「ちなみに、スタート地点は森の中だから。モンスターが出てくるから練習がてら頑張って〜。」

「おい！ふざけんな！そんなところに送るか！？」

文句を言った瞬間に意識が途絶えてしまった。

2話・え？こじこじ？（後書き）

どうでしょうか？1話目と比べてかなり長くしましたが、楽しんでいただけましたか？^^

まえがきに書いたようにキャラ対談始めます。まずは主人公の柳

浩介とケルビです。どうぞ！

浩介「キャラ対談初で俺を出すとはナイスだ作者！」

ケルビ「私はケルビではない！ケルだ！しかも名前のところまでケルビになっているではないか！？直せ！」

ん？直せ？

ケルビ「直してください……。」

よろしい。

ケル「つく……。」

浩介「ところで何で俺たちを呼んだんだ？」

んゝ、なんとなく？

浩介「なんとなくかよ!？」

いやゝ、あとがきでもギャグいれたら面白いんじゃないか？って思っています。

浩介「思いついてさ。じゃねえだろ。」

ケル「全くだ。行き当たりばったりではないか。」

う……そこは否定できない。

浩介「全く。こんな感じの作者だがこれからもよろしくな。」

ケル「意見・感想・アドバイス等あればなんでも言ってくれ。作者はまだまだ未熟だからな。」

ケルがそのセリフ言うの何か違和感……。

浩介「あ、俺も思った。」

ケル「なんだと!?!どこに違和感があるというのだ!?!それに主人公までそんなことを言うなんて……。」

浩介「あ、またいじけた。」

ケル「くそ〜！」

神様「ちよつと私の出番は〜!?!」

あ、忘れてた・・・。

3話・目が覚めたら森の中って・・・（前書き）

どうも。缶詰めです。早速異世界編に突入します。こちらでは戦闘シーンを少し入れてみました。ちよつと微妙かもしれないですが、^・^よろしくお願いします。ついでに新キャラ登場します！

3話・目が覚めたら森の中って・・・

目が覚めて周りを見渡しても木、木、木。

今俺は森の中にいるみたいだ。

何がどうなってこうなった？

待て、俺。よく思い出せ。確か、俺は電車に轢かれて死んだんだよな。

そして神様とかいうのに出会って俺は異世界に送られたんだっけ？で、最後送られる直前に神様が

「スタート地点は森の中だから。そこはモンスターがゴロゴロいるから練習がてら頑張ってる。」

だったか？

あの女・・・。

「ご主人、気がついたか？
ん？」

「うおわ！モンスター！？」

「モンスターって・・・。ひどいぞ。ご主人。」

あ、そういえば助けた犬もこっちに来てたんだな。犬といえば犬だが、あきららかに様変わりしてるからモンスターと間違えてしまった。器用に前足で「の」の字をかきながらいじけてるな。

「悪かったよ。ケル。ところでここはどこかわかるか？」

「いや、私もこの世界については全く知らないようだ。だが、向こうから何か匂いがするぞ。」

何かってなんだ？もしかして村があるとかか？

「お前結構鼻が利くんだな。とりあえずそこに向かうか？」
「私も役に立つだろう？そういうえば私は人型にもなれると神様が言っていたが試してもいいか？ご主人。」
「そういうえばそんなことも言ってたな。確かに見てみたいな。」

「ああ、いいぞ。俺も見てみたいし。」

「了解した。念じればいいのか？」

「いや、俺に聞かれても・・・。」

と、思っている内に人型になったみたいだ。

すごいな。カッコいいじゃないか。くそ・・・。ん？

「OK。いいぞ。元に戻ろうか。」

「何故だ！？ご主人！せつかく人型になれたのにいきなり戻るのが！？」

「うるさい。黙れ。しばらくは動物のままいろ。」

「むう。了解した。」

いや、確かに人型なるのは全然構わないんだが一つ忘れてた。ケルのやつ動物のままだと何も着てなかったから人型になると全裸になるんだよな。人型のまま歩き回ると確実に警察とかのお世話になってしまう。それだけは回避しなければ・・・。

「まあ、とりあえずその匂いのする方へ向かってみるか。ここにこのままいるよりかはマシだろ。」

このままここにいたら日が暮れて野宿になりかねないしな。

「わかった。ご主人。こつちだ。ついてきてくれ。」

「ん。りよーかい。」

そして、俺たちは匂いのする方向へ歩き出した。

しばらくするとケルが

「ご主人、匂いがすぐ近くになつてきたぞ。」

「そうか。といつても、村とかは見当たらないが、もしかすると人がいるのかもしれないな。」

と、そのときに目の前に犬？見たいな物が5匹出てきた……。

「おい、ケル。こいつらはなんだ？」

「……すまない。ご主人。こいつらが匂いの正体だ。」

マジかよ！？人でもなんでもないじゃねえかよ！見た目あきらかにモンスターっぽいじゃねえかよ！

「おい、ケルこのやろう！おもいつきりモンスターじゃねえかよ！自分と同じ匂いがするからつてそこに向かつてんじゃねえよ！」

「失敬な！私はいつらとは違うぞ！この姿になってから鼻が利くようになったのだから匂いの正体がわかるはずがなからう！」

俺らが口論してる間に向こうのモンスターがだんだん寄つてきてるのは気のせいかな？

「よし、ケル。ここはお前に任せて俺は後方に下がる。」

「待て！ご主人！ここは俺に任せてお前は下がれとかじゃないのか！？」

いや、一般人がこんなの相手にできねえだろう。

「わかったよ。俺も1匹ぐらい相手するからお前も4匹相手に頑張れ。」

1匹ぐらいなら案外いけるんじゃない？魔法も使えるらしいし。

「何故私が4匹も相手をしなければいけないのだ！？せめて3匹にしてくれ！」

「ごちやごちや言うなよ。ほら、5匹全部お前に向かつて行つたじゃないか。同胞に見られてるんじゃないのか？」

「ぬあつ！？何故だ！？貴様らと私は全く違う生き物だ！離れる！」

と、ケルが叫んだ瞬間に口から炎が噴き出した。

「うおっ！？何だ？いきなり口から火が出てるじゃないか。ケルベロスだからそうだったイメージが反映されているのか？」

「私も意外と驚いているのだが、まあラッキーというやつだ。おかげで3匹倒したぞ。」

倒したというかもう完全に炭じゃねえかよ……。
と、思ってるうちに1匹が俺に走ってくるじゃねえかよ！

「な、マジかよ！？ええと……吹き飛ばせ！」

手を突き出して叫んだらモンスターがいきなり後ろに吹っ飛びやがった。

「え？マジで？こんな呪文でいいのか？
なんていい加減な……。」

「ご主人……。適當すぎではないか？おっと。
ケルのやつやるな。軽々と避けやがってる。」

「いきなりで何か思いつくわけないだろう。
敵が動いていない今のうちに何か考えておくか。」

「んー。《氷よ 鋭き槍になりて敵を貫け》！」

すると氷が現れて氷柱みたいのになって更に吹き飛んだ敵に向かって飛んでいった。

ドスッ

「ギャン！」

見事敵の横っ腹を貫いて暫く悶えていたが、みるみる体が鈍くなつて動かなくなつた。

こんな血を見るのは初めてだな・・・。

ケルの方はどうなっているんだ？

「ご主人！見てくれ！私もやればできるだろう。」

驚愕した・・・。

ケルが敵の首を噛み千切って頭と胴体が離れ離れになっている。

こっちのほうグロテスクだな・・・。多分こっちの世界では日常茶飯事なのだろうが、早く慣れないとな。

「ご主人。大丈夫か？顔色が優れないが・・・。」

「いや、大丈夫だ。こんなグロテスクな光景はリアルでは初めてだから・・・。お前の方こそ大丈夫なのか？」

「私は知性はあるが動物だからな。耐性はあるみたいだな。」

そうか。動物だからか。うつぶ。気持ち悪い・・・。

「少し歩いたら休んでもいいか？」

「もちろん構わないぞ。ご主人。・・・待て。何か新しい匂いが・・・。」

またかよ・・・。今度は何だ？

「またモンスターか？」

「いや、さっきの奴らとは違うみたいだ。」

何が出てくるのやら・・・。

ガサガサッ

「おい、大丈夫か！？モンスターの声やら人の声がしたが？」

・・・え？

人が現れた。いや、人は人でもケルの人型みたいないわゆる獣人がそこにいた。

腕や頭を見る限り灰色の虎っぽい獣人が出てきた。しかもでけえ。

ケルと同じぐらいか？180cm強はあるんじゃないか？やっぱり
というか、服を着ている。

「いや、えっと・・・。道に迷ってしまつて森の中をさ迷つてい
たらモンスターに出くわしてしまつて。で、倒したところであんた
が出てきたところだ。」

さすがに異世界からこつちの世界に現れて森の中にいました的な説
明は頭を疑われてしまうな。

「そうかそうか。いや、無事でなによりだ。つておい！まだモン
スターがいるじゃないか！？」

あ、ケルのことか。つておいおい、剣を構えだしたぞ！

「待て待て！こいつは俺の仲間でケルベロスつて言うんだ！敵じゃ
ないぞ！」

「そつだ！私をこんな奴らと一緒にしないでくれ。」

あ、喋つても平気なのかな・・・？

「え？喋つた〜！？なんでウルフが喋るんだ！？」

ん？そこら辺で死んでるモンスターの何か？

「なあ、ウルフつてそこら辺に死んでるやつのことか？」

「ああ、そつだが・・・知らないのか？」

まあ、知るはずがないよな。この世界の常識そのものを知らないん
だから。

「まあね・・・。結構遠い所から来てここで初めて出くわしたから
ね。そついえばあんたの名前は？俺の名前は柳 浩介だ。自己紹介
していなかつたな。」

「ああ、すまない。ヤナギか。変わった名前だな。」

「おっと、すまない名は浩介の方だ。」

「そうか。コースケだな。俺の名前はヴァン・エルシアだ。よろしくな。」

「ああ、よろしく。ところでさっきの話なんだがケルみたいな奴はあまり見かけないのか？」

ケルについて色々と聞いておかないと後で取り返しのつかないことになりかねないからな……。

「まあな。こいつみたいにモンスターの姿でしかも喋るやつは見たことないな……。」

なるほど。とりあえず街とかに入った時は喋るのはやめさせた方がいいな。

「そうか。というわけで、ケル。お前は人前で喋るの厳禁な。」

「待ってくれ！それはさすがに酷くないか！？私には人型になれるのだから街に入る時はその姿になればいいのではないか！？」

そっすえば、そうだったな。うっかりしてた。

「なに！？こいつ俺みたいな姿にもなれるのか？」

「ああ、なれるぞ。けどしばらくはさせないように言っている。」

「何故だ？何かまずいこともあるのか？」

大いにね……。

「ケルの今の格好からそのまま人型になったらどうなる？」

「……なるほど。確かにその格好で人型になると色々まずいな。」

わかってくれてなによりだ。

「一体何がまずいというのだ！？私にはさっぱりだぞ！」

「お前は最初動物の姿だったからそのまま人型になったらどうなる

と思う？」

「……あ、なるほど。」
なるほどじゃねえよ。すぐに気づけての。

「はあ。ところでこの近くに街はないのか？」

近くに街がないとやばいな。動き始めてから結構時間が経ってきたしな。

「ああ、ここから歩いてそうかからない所に街ではないが国があるぞ。結構でかい……な。」

「そうか、国か。ということは城もあるわけだな。」

「ああ、その通りだ。国というほどだからかなり栄えているぞ。ここら辺じゃあ有名だが知らないのか？」

国というくらいだから有名なのは当たり前か。

「人里はなれたところから来たもんでね。」

「そうだったのか。ところで、あんたのその格好は何だ？やけに防御が薄そうだな。」

そうだった！今の俺の格好は向こうの世界では全然普通ここにいるはそれは通用しないのか……。

「あ……まあ、その俺の住んでたところは結構安全な場所でモンスターもそうそう出てくる場所じゃなかったんだよ……。それでちょっと油断していたというか……まあそんな感じだ。」

なんか苦しいいい訳だな。それにヴァンも軽装だが胸当てとかつけてるしなあ。明らかに俺はこんなモンスターが出てくる所にいるよ
うな格好ではない。

（ご主人。最後がなんか苦しそうだったぞ。）

（わかってる！いきなりでよく考えたほうじゃないか！）

「そうか？まあ、それなら仕方ないか。向こうについたら武具店で色々と買い揃えた方がいいぞ。武器も防具も持ってなさそうだしな。ついでにケルベロスの着替えも買っておくといいぞ。」

「そういえば、武器も何も持ってないじゃねえかよ。神様もそこらへんサービスしてくれよ……。」

「そうだな。ありがとう。よかったな、ケル。着替えを買ったら人前で人型になれるぞ。」

「嬉しいのだが、その前に私たちは金を持ってないのではないか？」

「あ……。しまったー！それを忘れてたー！」

「なに！？お前たち金も持ってないのか？」

「いや、それはここにくるまでに全部使い果たしちゃって……。どうしようかな〜と……。」

何か前途多難だな……。

「そうか。それならこのウルフの牙を持っていくといいぞ。口の中の一番奥に一際大きい牙があるから、それをギルドに持っていけば、討伐報酬で一体につき銅10枚もらえるぞ。」

銅？その辺はよくわからないが後で教えてもらうか。

「そうだったのか。教えてくれてありがとう、ヴァン。これでなんとか凌げるよ……。」

「これぐらい何でもないさ。じゃ、そいつらの牙を抜いたら出発するか。」

「そうだな。少しの間だが、よろしくな。」

「私からもよろしく頼む。」

「ああ、こちらこそよろしく。」

こうして俺とケルは異世界での一歩を踏み出した。

3話・目が覚めたら森の中って・・・（後書き）

どうだったでしょうか？楽しんでいただけましたか？それでは早速キャラ対談始めちゃいます。ゲストは前回出て来れなかった神様と新キャラヴァン・エルシアです。

神様「やつとあたしの出番が出てきたわね。というか作者、普通前回出すべきじゃなかったの!？」

ヴァン「新登場でいきなりあとがき登場とはやるじゃないか。作者

」

浩介「あれ？俺ゲストじゃないのに何で出てきてるの？」

神様「すみません。やっぱ先に主人公出すべきかな」と思って主人公とそのお供を出しちゃいました^^；

浩介は主人公だからレギュラーね。

浩介「何だと!? ナイスだ作者!」

ヴァン「ところで、今回は何をやるのだ？」

あゝ、そうだね。じゃあお金について説明しようか？

神様「本編では説明がづらいからってここで説明するなんて。」

ま、まあそこは文才のなさってことで勘弁してください;;

ヴァン「まあ、そこは読者様次第だね。」

きつとあとがきも見てくれてるはず!

浩介「それよりそろそろ説明したほうがいいんじゃないか？」

それもそうだな。

まず、お金は全て貨幣で取り扱ってて価値の低い順に銅、銀、金、プラチナ、この4種類で取引が行われているわけです。

そして、銅を100枚で銀1枚、銀100枚で金1枚、金1000枚で白金1枚、とこんな感じですね。

浩介「おい、作者。白金だけ1桁違うくないか？」

違わないよ。白金はお金だけじゃなく武器の素材としても使われているからね。しかも素材に使われると超1級品の武器になるんだよ。

冒険者としては一生に一度は手に入れた代物だからね。

浩介「なるほど。それで1桁違うわけか。」

そういうことさ。ついでに今向かってる国の名前だけ説明しておきますね。

その国の名前は《グランパリス》です。

と、まあ今回のあとがきはこの辺で終わりにしたいと思います。

浩介「まだまだ未熟で、文才のない作者ですが。」

神様「これからもよろしくお願いします。」

ヴァン「意見・感想・アドバイス等あったらなんでも送ってください。

きっと作者の励みになるはずだ。」

というわけでこれからもよろしくお願いします。

神様「結局あとがきでそんなに話しなかつたんですけど。」

あ、そ・・・それはですね」

神様「問答無用！シャイニン○ウィザード！」

アベシツ！

4話・異世界の街ってファンタジーっぽいな(前書き)

この話は大々的に修正しました。結構内容が変わってしまったので
すみません^^;

4話・異世界の街ってファンタジーっぽいな

俺とケルとヴァンの3人は近くにある街というか国へ向かっていた。しばらくしてヴァンが

「そういえばコースケってさっき魔法使ってたよな。魔法使いなのか？」

ん？もしかしてここでは魔法は希少なのか？

「なんだ？もしかして魔法って珍しいのか？」

「いや、別にそういうわけではないんだが……。コースケがいたところでは珍しかったのか？」
珍しいというかないからね。

「まあ、そんなところだな。魔法って人によって使える属性と違ってあるのか？」

「そうだな。基本的に人が使える魔法はせいぜい2種類程度かな？ たまに3種類使えたり特殊な魔法が使えるのもいるがな。」
なるほど。魔法は色々な属性を使わない方が無難か？

「そうだ。ヴァン殿。魔法の詠唱ってどういう風なのかわかるか？」
(ケル！お前それ聞くなよ。俺の詠唱が間違ってたらどうすんだよ？)

(あ！しまった……。まあ、なるようになれと言わないか？
ならねえよ。まったく……。)

「そこはよくわからないな。獣人は魔法が使えないからな。コースケはどんな風に詠唱するのだ？」

「えっと……。こんな感じかな？」

土でいいかな？土ね。よし、これでいくか。

《土よ。我らを守る盾となれ。アースシールド。》
ズゴゴゴゴッ

土が俺たちの周りから盛り上がったきてヴァンの身長分の壁が出来上がった。

「ほお。土属性か。」

「それはそうと、これはどうやって元に戻すのだ？」

あ……。

「元に戻れ。」

ズゴゴゴゴッ

マジで元に戻ったよ……。

「え？あんな詠唱でいいのか？」

ヴァンも混乱してしまったじゃないか。

「ご主人は規格外だからな。適当な詠唱でなんとかなるものなのだ。」

「

おい！ケル！規格外とは何だ。

「そういえば、さつき獣人は魔法使えないって言ってたよな。魔法は人間しか使えないのか？」

「そうだ。魔法は獣人には扱えないのだ。代わりに俺たち獣人は力が人間よりも強いかな。」

なるほどね。いわゆる人間が魔法タイプで獣人が戦士タイプというわけか。

「お、そろそろ街に着くぞ。」

やっと街に着いたか。モンスターに会って少し疲れたな……。

「本当か？ありがとう、ヴァン。それと物は相談なんだが……。これはダメ元だが聞いておかないとな」

「ん？なんだ？」

「俺たちこの街について右も左もわからない状態なんだ。色々と道案内を頼みたいんだが……。」

「おお、そうか。問題ないぞ。今日はもう遅くなりそうだから宿屋だけ案内して明日色々と道案内をしてやるう。」

いよっしや。聞いてみるものだな。あつと、そうだ。

「ちなみにケル。お前は暫くそこで待つてろ。お前がその姿で入ると騒がれかねないからな。すぐに着替えを買ってきてやるから。」

「むう、そうか。それは致し方ない。できるだけ早く頼むぞ。」

「ヴァン。悪いけど、先にギルドで換金してから衣服を売ってる場所まで案内してくれないか？」

「構わないぞ。じゃあ、まずはそこへ行くか。」

さくつと買ってさくつと戻ってきてやるか。かわいそうだしな。

早速俺たちは街の中にいるのだが。

周りを見ても獣人ばかり。人間は少ないみたいだな。

色々な種類の獣人がいるみたいだな。

「どうだ？中々大きいだろう。この国の名前はグランパリスと言うんだ。」

「ああ……。これは驚いた。ものすごい活気だな。」

すごい人ばかりだな。これはへたすると迷子になりかねないな。

「それじゃ、早速行くか。ついてきてくれ。」

「ああ、わかった。」

少し歩くとある看板の前でヴァンが止まった。看板には剣と杖がク
ロスした絵が写っていた。

ふむ、これがギルドね。

「ここがギルドだ。ここで討伐したモンスターの報酬や依頼等を受
けることができる。」

なるほど。そこはゲームの世界でありがちな設定なわけだ。

「その受付に討伐したモンスターの部位を渡せば報酬がもらえる
ぞ。」

「わかった。ありがとう。」

そう言つて、受付まで歩いたが……。驚くことに受付も獣人だっ
た。耳が猫っぽいな。猫獣人か？

「すみません。討伐報酬をもらいたいんですけど。」

「はい。ウルフの牙5つですね。こちらが報酬の銅50枚です。」

「どうも。」

これで、ケルの服を買うことができるな。銅1枚でどれだけの買い
物ができるのだろうか……。

「お待ちせ。」

「おう。じゃあ、次は服を買いに行くか。」

特に何も言わないということはこれで服1式は揃えられると思ってい
いんだよな？

また、歩いた先に看板が見えてきた。これは服の絵だな。

「ここが服が売ってある場所だ。さ、入るぞ。」

「おう、いらつしやい。」

え？蜥蜴？いわゆるリザードマンか？服屋にリザードマンはミスマツチではないか……？

「さてと、服を買うのはいいが、あいつの背丈を俺は知らないんだが……。」

そうだったな。確かヴァンと一緒にだった気がする。

「確かヴァンと一緒にの背丈だった気がする。」

「そうか。おやっさん、俺と同じ背丈の着替え一式揃えてくれないか？」

「お客さんと同じのですかい？」

「ああ、そうだ。それで頼む。」

「わかりやした。少しお待ちを。」

今のうちに金について聞いておくか。

「なあ、ヴァン。今俺銅50枚しかないんだけど、服買ってさらに宿屋に泊まることはできるのか？」

「む、それはちょっと厳しいな……。服は結構高いからな。今からギルドに行ってクエストを受けるにしてももうすぐ日が暮れるしな。……そうだな、今俺は宿屋に泊まってるんだが、俺の部屋に泊まるか？」

マジか？それは願ったりかなったりだな。

「いいのか？それは助かる。何から何まですまない。」

「いや、それは構わないさ。ただ、少し気になることを聞いてもいいか？」

ん？気になること？これはちょっと言い訳が苦しすぎたか？

「ああ、なんだ？」

「いや、ここではあれだから・・・、宿屋についてから話そう。」
「うわあ、これはまずいな。本当の事を話さなきゃいけないかな？」

「ああ、いいよ。」

「すまないな。」

こんな話しをしているうちに

「はい。お待たせしやした。しめて銅40枚です。」

銅40枚か。残り10枚か。ヴァンがいなければ野宿決定だったな。

「銅40枚だ。これでいいか？」

「はい。確かに。またのお越しを。」

さてと、ケルのところまで戻るとしますかね？

「じゃあ、一旦街の外にいるケルのところまで行こうか？」

「ああ、そうだな。」

街の外に出た俺たちは

「ご主人！遅かったではないか！待ちくたびれたぞ。」

ものすごい勢いで駆けてきている。この速度で突っ込んできたらヤバイかもな。

「よつと。」

ズシャー――

「フギヤッ」

おお。10メートルぐらいは滑ったんじゃない？

「何をする！？ご主人！何故避けるのだ！？」

「いや、あの速度で走ってきたら俺大怪我するんじゃない？」

「それはご主人がこっちに来てから身体能力が上がっているのだからあれぐらい耐えられるだろう。」

あ、ヤバ

「こつち？身体能力？」

「あ、いや、これはだな……。」

どうやって誤魔化すべきか。

「いや、いい。それも含めて宿屋で話しをしてもらうつもりだ。」
あちゃ。これはもう確定だな。

そしてしばらくヴァンの後についていつてる間に俺とケルは（ちなみにケルは獣人の姿になっている。）

（おい、ケル。お前が口を滑らせたからバレたじゃないか。）

（いやいや。ご主人の言い訳が下手なせいであって私が口を滑らさなくてもきつとバレてたに違いないぞ。）

（てめえ、じゃああの場でどう言えば良かったんだよ。あれが精一杯だったつうの。）

（まあ、過ぎてしまったことは仕方ない。ここは正直に言うしかないだろう。誰にでも失敗はある。）

「だから！なんで俺のせいになるんだよ！？」

「どうした！？いきなり大声を出して？」

やべつ。ついカツとなって声を張り上げてしまった。

「いや、すまない。なんでもない。」

くそう、いらん恥をかいてしまった……。

隣でニヤニヤしてるケルが異様にムカつく。

「《氷よ》（ボソツ）」

「イタツ。」

はっ。ざまあ。

あ、しょぼくれて耳と尻尾が下に垂れてる。まあ、自業自得だな。

「着いたぞ。ここが宿屋だ。」

とうとう着いたか。なるようになった。

「丁度3人部屋しか空いてなくてな。何か飲み物を入れよう。コーヒーと紅茶とお茶どれがいい？」

異世界なのに3種類全部そのままの名称かよ？ここは無難にお茶でいくか？

「俺はお茶でお願い。」

「私はコーヒーで頼む。」

意外とチャレンジャーだな。元の世界と名前が一緒なだけで中身は違うのかもしれないのに。

「わかった。お茶とコーヒーだな。少し待ってる。」

さてと、今のうちにどうするか話し合うか。

（なあ、本当にいいのか？話しても。なんか本当の事話して黄色い救急車に運ばれたりしねえよな？）

（ご主人。ここは異世界だぞ。黄色い救急車などあるはずがなからう。それにヴァン殿は話しても問題ないような気がするのだが。色々怪しい部分があったにも関わらず親身になってくれたではないか？）

（確かにそうだな。・・・そうだな。話してみたら意外と理解してくれるかもしれないな。）

と、話し終えたと同時にヴァンが戻ってきた。

「待たせたな。ほらコースケ、お茶だ。ケルベロスにはコーヒーだつたな？」

うん。俺の方は全然お茶っぽいな。ケルの方はどうなんだ？

「ヴァン殿……。これは本当にコーヒーなのか……？」

うわっ、このコーヒー、色が黒っぽいけどなんか赤も混じってるんですけど……。

「ああ、そうだが？どうした？飲まないのか？」

元の世界のコーヒーの色を知っている分これは飲みずらいだろうな……。

「いや……。いただくぞ！」

おおっ！声に張りがあるが、コップを持って口に近づけるまでで止まってしまった。

「うっ……。くうっ。」

おお。飲んだ。味の方はどうなんだ？

「ゲホツ！なんだこれは！？辛っ！苦っ！」

はっ！？苦いはわかるがまさか辛いって単語が出てくるなんて……。あぶねえ。危つく俺も同じ道を辿るところだったのか……。

「あ、すまない。俺の試作品を入れてしまったみたいだ。これはあまり万人受けしないのか？もう少し改良すべきか？」

「ちよつと待て。試作品？」

「ああ。俺がちよつと手を加えて苦味だけじゃなく辛味をすこし加えてみたんだ。これはこれで美味しいぞ。飲んでみるか？」

「いやあ、俺も辛いのは少し苦手なんだよなあ。」
「コーヒーに辛味を入れてどうするんだよ。美味しくなるはずがないだろ。」

「そうか。それは残念だ。じゃあ、そろそろ本題に入るがいいか？」
来たか。まあ、言うことは決まった。あとは納得してもらおうだけだ。

「ああ、いいぞ。何を聞きたいんだ？」

「まずは、あんたたちは何者なんだ？遠くから来た旅人っていうのは嘘だろう？旅人が何も持たずにあんな森の中をいるはずがない。」

「わかった。全部素直に話すが、多分信じれないだろうから。気になることがあつたら何でも聞いてくれ。」
全部一気に話しても頭が追いつかないだろうな。

「まず、俺たちはこの世界の人間じゃない。」

「やっぱりそうなのか……。通りで何も知らないわけだな。」

「やっぱりって……。こつちの世界では異世界は当たり前前に存在してるのか？」

「は？いや、待て待て。何でわかってんの？俺らからしたらあり得ないと感じるんだけど。」

「俺も信じてはいなかったんだけどな。俺の祖先は一度異世界から来たという人間に出くわしたんだ。その人間が異世界から来たって言うってたんだ。その人間はよくわからないカタナという武器を持っていて、明らかに人間離れした力を持っていたらしい。それにカタナ以外にも素手での技をいくつか持っていてな。それにその人間は明らかにこの世界では来ていない格好をしていたらしいんだ。コースケはカタナと素手での技の存在を知ってるか？」

昔にも俺みたいに飛ばされたやつがいるんじゃないかよ。

「ああ、知っているよ。刀は剣とは違って叩き斬る代物じゃなくて刀身が細く切れ味だけを重視した武器のことだろ？そして素手での技は多分武術だな。」

「そうか。確かに異世界から来たのだな。じゃあ、なんで森の中にいたんだ？」

「ああ、それね。今思い出してもムカつくぜ。」

「ご主人それは私も気になってたところなんだが……。」

「あ？そりゃあお前がいじけてたから神様の話を聞いてなかっただけだろ。あの時神様が練習がてら森の中で頑張れと言いやがってな練習もなにもぶつつけ本番じゃねえか。あのやろ……。」

「いじけてたわけではないぞ！？ちよつと心に傷を負っただけだ。断じていじけてたわけではない。」

「いやいや、俺が見てた限りではお座りしてた状態で耳と尻尾が垂れてたし、お前の周りから負のオーラっぽいのが出てました。」
「ちよつといじつたらまた、いじけやがった。本当この姿と心がアンバランスだな。しょうがないな。」

「俺が悪かったから、ほら機嫌直せよ。」
と、頭を撫でてやると。

「フンツ！私はそんなので誤魔化されんぞ！」
と、言いつつ尻尾が若干左右に振れている。わかりやすっ！やっぱり元は犬だから頭を撫でると喜ぶものだな。

「で、どこまで話してたっけ？」

俺が手を頭から離すとケルが少しばかりガツカリしてる。

「その神様っていうのが森の中に放り出したところだな。」
「あ、そこらへんか。じゃあ殆ど説明し終えたかな？」

「こんなものか？後はそのウルフってのに出会って、ヴァンに出会ったんだよな。あの時ヴァンに出会えなかったら本当にやばかったよ。ありがとう。」

あそこでヴァンに会わなかったらモンスターがいる森の中で野宿決定だったかもしれないしな・・・。

「いや、それはいいさ。俺もこんな一生に一度あるかないか、むしろない出会いがあつて嬉しいしな。」

こんな出会いがしょっちゅうあつてたまるか。

まあ、そんなこんなで理解してもらつたヴァンだが、今度は俺たちの世界について聞いてきた。色々説明してやるとヴァンは常に驚いた顔をしていた。

「本当か！？乗り物が全て鉄の塊でできているのか！？」

「ああ、そうさ。結構便利なんだけど、色々と便利になりすぎると色々不都合があつたりするんだよな。環境汚染とか。こつちに来て空がとても綺麗に感じたのは生まれて初めてだ。元の世界だとこんな綺麗な星空は見えなかつたからな。」

「うむ。土地を増やしていつて自然を減らすのも便利さは増すが、自然がなくなることと死んでいく動物もいるものだ。生活に自然は切つて切り離せないものがあるな。」

言いこというじゃないか。何もこれ以上上を目指そうとしなくても十分生きていけるわけだしな。

「なるほど。自分達の生活を潤わせても知らないところで不都合が生まれたりするものなんだな。」

「まあ、そうだな。だからむしろヴァンの世界みたいなのところのほうが生活しやすいのかもな。」

「ふっ、そうかもしれないな。さて、もう遅いだろう。そろそろ寝るか。」

もうそんな時間か。この世界は時計がないからわかりづらいな。腹時計か……？

「あ、その前に明日の行動を話し合わないか？」

「それもそうだな。俺としてはコースケとケルベロスは金がないんだよな。明日はギルドに行つて登録して依頼を何個か受けて金を集めるのがいいのかもしれないな。」

「ヴァン殿。私のことはケルでいいぞ。依頼というのは今日みたいな討伐か？」

「まあ、そうだな。討伐の方が金になるし、近い場所に依頼が2つあつたら2つとも受けてつてな感じなのもできるかな。」
なるほど。たしかにお金がないと何もできないしな。

「わかった。それじゃあ明日はとりあえずギルドだな。」

「そうだ。それじゃあ、寝るか。」

「わかった。ところでこのほんわり光ってる明かりは何なんだ？消えるのか？」

さつきからずつと気になってたんだよな。この世界って電気とかないだろうし。

「ああ、これか？これは魔石といってこれに属性の魔力を込めればその属性の石になるんだ。これは光の属性がついてるからこういう風に光ってるんだ。」

「なるほど、結構便利だな。ありがとう。」

「ああ。何かわからないことがあつたら何でも聞いてくれ。」

「助かるよ。それじゃあ寝るか。お休み。」

「お休み。ヴァン殿。」

「ああ、お休み。」

俺たちはベッドに入って眠りに就こうとした。

ふうっ、今日1日色々あったな。内容が濃すぎるが……。けど、元の世界よりも楽しそうだ。こういったファンタジー世界はゲームでよくやって好きだったんだよな。

明日はギルドで登録か。まさにゲームだな。楽しみだな。

俺は今日の1日を思い返しながら眠りに就いた。

4話・異世界の街ってファンタジーっぽいな（後書き）

ちよつと早いですが浩介とケルがどこから来たかをヴァンにばらしちゃいました。ばらした方が書きやすいんですね、これが^^；ばらさなかつたらなんか不自然さが残りそうだったので・・・さて、ではおなじみキャラ対談！

今回は神様を除いた3人方です。どうぞ！

浩介「作者。文才がなさすぎではないか？」

ケル「何故前回は私は抜きだったのだ？」

ヴァン「2回連続で出してくれるとは俺もレギュラーか？」

浩介君、君は登場いきなり毒吐くのやめてくんない？

前回は神様出すために君は呼ばなかったのさ。3人が丁度よさげだからね。

ヴァン。君には一応バラしたけどどうなるかはわかんないよ。この後君がどうなるのかまだ決めてないからね。

ヴァン「何だと！？もしかしたらこれが最後かもしれないのか！？」

さあ〜どうだろうね？後1回は最低でも出れるんじゃない？

浩介「1回でもそれ以降は出れなくなるんだよな。意味なくね？」

ケル「私はレギュラーなのに連続で出ないのだが・・・」

大丈夫大丈夫。次回新キャラでなかったらケルは出す予定だよ。

ケル「新キャラが出たら私はまた出れないのか！？なんだその中途半端な位置づけは！？たまにはご主人をどこでもいいのではないか！？」

浩介「おい、ケル。てめえ、俺は主人公だぞ。俺をどけようとするとはいい根性だな。」

ケル「あ、それはだな・・・ご主人。」

浩介「うるさい！喰らえ、北〇百烈拳。ほ〜あたたたたたたた！」

ケル「おぐっ！あべし！」

まあ、あの二人は置いておいて。どうでしたか？色々書き損じが

あるかもしれませんが・・・。

ヴァン「意見・感想・アドバイス。何かあったら遠慮なく言ってくれ。」

では、また〜。

浩介「ほあちゃ〜!」

ケル「ぐへらあ〜っ!」

5話・ギルドで一攫千金？無理だろ（前書き）

申し訳ありません！更新がかなり遅くなってしまいました。執筆スピードは遅いですがよろしくお願いします^^；

5話・ギルドで一攫千金？無理だろ

「おーい。朝だぞ。」

「ふああゝ。ん？・・・あ、そうか。違うんだよな・・・。」

いつもは目覚ましで起きてたからな。自発的に起きるといふことは難しいな。

「おはよう。ヴァン。悪いな。起こしてもらって。」

「気にするな。ところで、ケルなんだが・・・。見てもらえるか？」

なんだ？ケルのやつどうかしたのか？

・・・なんで人型じゃなくて動物の姿なんだ？しかも丸まってやがる。

「おーい。起きろ。ケル。」

起こそうとしてさりげなく額にデコピンしてやった。

「ふぬあつ！何だ！？・・・ご主人か。って、今何をした！？」

「普通にデコピンだ。何でその姿なんだ？」

若干涙目だな。そんな強くした覚えはないんだが・・・。

「なんで起こすのにデコピンが必要なのだ・・・。はあつ。人型で寝るより丸まった方が寝やすかったのでこの姿で寝たのだ。」

おいつ。まったく・・・。動物の姿は危ないって昨日言っていたのに。

「いいか、ケル。その姿だとモンスターと間違われるって言っただろ。だから人がいないからと言って簡単に動物の姿になるなよ。寝るときはなるべく人型で寝てくれ。いつ誰に見られるかわからんからな。」

「そうか。すまなかった。これからはそうする。」

わかればよろしい。丁度話しが終わったところで

「お前らも色々大変だな。朝食を食いに行くか。」

「そうだな。ケル、お前は着替えたら来いよ。」

その姿はここでは危ないからな。やっぱり。

「了解した。人間とは面倒くさい生き物だな。いちいち着替えなおさなければならぬとは。」

うるせつ。羞恥心があるんだよ。

「ところで、この宿屋は朝食つきなのか？俺たちは宿代払ってないんだが……。」

「ああ、それか。安心しろ。俺がさっき2人分増やしてもらった。

朝食は銅5枚だから足りるはずだ。」

「そうか。それなら足りるな。」

「すまない。待たせたな。」

お、ケルが来たみたいだ。

「いや、まだ食べてないから平気だ。」

飯はどんなものなんだろうか。
見た感じそう変わりはないな……。パンにスープにサラダと何か薄切りにされた肉があるな。

「さて、食べるか。」

「ああ。いただきます。」

「いただくぞ。」

飯を食べ終えた俺たちは早速ギルドにいつてきた。

「ケルはここに来るのは初めてだな。昨日説明したとおり受付に行つてギルド登録してくれ。必要な物は特にないから安心しろ。」

特に身分証明とかはいらないわけだな。こつちの世界には印鑑なんてないだろうしな。

「わかった。いくぞ、ケル。」

「了解だ。ご主人。」

俺とケルは受付まで行つて

「すみません。ギルド登録をしたいのですが。」

「かしこまりました。でわ、こちらの紙に手を置いてください。」

今度は猫？ 獣人ではなく普通の人間だった。この紙に手を置くだけでいいのか？

「はい。それでは名前を教えてくださいますか？」

「コースケ・ヤナギです。」

「ケルベロスだ。」

「はい。ありがとうございます。それでは手続きをしまいりますので少々お待ちください。」

あれ？これで終わりか？手を置いて名前を言うだけで終わったんだけど。

「ケル、こんなんでいいのか？何か拍子抜けなんだけど。」

「そこを私に聞いてみましょうがないか？ここはヴァン殿に聞いてみるのがいいのではないか？」

それもそうか。ちょっと聞いてみるか。

「なあ、ヴァン。登録って手を置くだけでいいのか？あれって何か意味があるのか？」

「ああ、あれだけで大体終わりだな。あれはその人の魔力を見るものだ。魔力は人それぞれ違いがあるんだ。それを使ってギルドカードを作るんだ。それからはそのカードが身分証明になるわけだ。俺たち獣人にも魔力はあるのだが、その魔力を外に出して変換することはできずに体内でのみ変換できるんだ。肉体強化とかな。」

なるほど。獣人にも魔力はあるんだな。じゃあ、俺も魔力を肉体強化に回せば結構強くなれるんじゃないやね？

「俺も魔力を肉体強化に回せるのか？」

「ああ、できるぞ。魔法が苦手な人間も肉体強化に回してるのもいるしな。」

へえっ。そうなんだ。今度練習でもしてみるか。

「そうか。ケルも出来るんだよな？」

「ああ、ケルは獣人だから出来るのではないか？多分……。」

「良かったな。これでお前も規格外に近づいたんじゃないか？」

「失礼な！私はご主人とは違って普通だぞ！」

「俺を人外みたいに言うな。お前動物の姿だったらウルフ3匹一気に消し炭にしたじゃねえか。人型だったらもつと強いんじゃないのか？」

口から火を吹くだけでモンスターを炭にできるんだ。人型だとなるのやら。

「お前火を吹くこともできるのか？勢い余って俺たちに当てるなよ。」

「安心しろ。この姿だとどうしてか火を吹くことは出来ぬ。しばらくこの姿で行動してみるから火を吹くことはそうないぞ。」

そっか。外だからといって誰に見られるかわかったもんじゃないかな。

「コースケ・ヤナギさん。ケルベロスさん。手続きが終了いたしました。」

お、終わったみたいだな。

「こちらがギルドカードになります。ギルドについて説明を致しますでしょうか？」

「はい。お願いします。」

「それではまず、ギルドについて説明致します。ギルドは様々な人々からの依頼の仲介所のようなものです。こちらで依頼を掲示板に張り出し、ギルドに所属している方がそれを受注するといった形です。依頼にはそれぞれ分類があります。討伐、採取、護衛、運搬

といったようにそれぞれ内容が違いますので依頼内容はきちんと読んでください。それぞれの依頼には我々ギルドが指定したランクというものがあります。ランクについてご説明致しましょうか？」

「お願いします。」

「ランクについてですが、これは依頼の危険度を示しています。ランクはF〜特Sまであります。ギルド登録した方にもランクがありますので、最初はFから始まります。今自分のランクより二つ上のランクは受けることはできません。これは下位のランクの方が上位のランクを受けて死亡する恐れを減らすためです。ランクを上げるためには自分のランクをいくつかこなし、ギルドが昇格できる実力があると判断しましたらこちらからお知らせします。ちなみにランクS以上になりますと、緊急依頼が張り出される時があります。ランクS以上の方はこれを拒否することはできませんので注意をランクSはランクを上げるか上げないかの選択ができますので緊急依頼を受けたくないという方はランクAを保持し続けることもできますのでご安心を。それと、自分のランクより二つ上のランクは受けることはできないと申しましたが、パーティーで参加する場合、一番上の方のランクに合わせるができます。こちらは自分のランクより三つ以上上でしたら1回成功させるだけでランクが一つ上がります。ですが、これは危険も上がりますのでパーティー内でよく相談してお決めください。ランクについては以上です。何かご質問はありますか？」

「いえ、特にないです。」

「それでは次に分類についてのご説明を致しましょうか？」

これは、なんとなくわかるからいいかな？

「いえ、それについては結構です。」

「かしこまりました。それではギルドについてのご説明を終了致します。ギルドカードはなくさずにお願致します。紛失した場合の再

発行は銀1枚になりますのでご了承下さい。」

「わかりました。」

大体わかったぞ。まずはヴァンと相談するか。何を受ければいいのか俺には見当つかないしな。

「ヴァンはギルド登録してるんだよな。今はランクはどれなんだ？」

「俺はランクBだな。」

「ランクBか。すごいな。ヴァンって結構強いんだな。」

「そうでもないさ。ランクBなんて頑張ればいけるようなもんだぞ。」

「またまた。謙遜しちゃって。ところで、依頼を受けるんだけどヴァンのBランクに合わせれるんだよな。」

「ああ、そうだが。けど、いきなりランクBは色々と危ないからな。俺は君たち二人の実力を知らないわけだし。ランクD辺りを選んでみたらどうだ？ランクDなら1ランク上がるわけだし。」

それもそうか。じゃあ討伐でいくつか選んでみるか。

「とりあえず何か依頼でも見てみるか。」

色々と見てみるとそれなりに数はあるみたいだな。

「これはどうだ？ウルフの討伐とゴブリンの討伐。ウルフは10匹討伐で銀4枚で、ゴブリンは15匹討伐で銀2枚。この2匹は昨日いた森の中にいるからな。ついでにその森の中にあるカンシユ草採取の依頼も受けてみるか？これもモンスターが生息している場所に生えているのとあまり受ける人がいないのとで銀4枚の報酬だぞうだ。」

昨日倒したウルフはランクDなのか？ゴブリンって想像だと緑色の体の棍棒もったモンスターってイメージが強いんだけど……。それに銀4枚？討伐よりも報酬がいいじゃないか？受ける人がいないとも言ってたな……。何か訳ありか？

「ウルフとゴブリンってランクDなのか？それにカンシユウ草ってどういう草なんだ？受ける人がいないってのもどういうことだ？」

「ウルフは単体だとランクEだが基本群れで行動しているからな。だからランクDなんだ。ゴブリンはランクEだな。ゴブリンも同じだな。こいつは単体だとランクFだ。駆け出しでも普通に倒せる。カンシユウ草についてはある臭いを発するからな。」

「臭いを発するのか。ケルがいれば簡単に済みそうだな。」

「任せてくれ。私はかなり鼻が利くからな。」

「ちなみにそのカンシユウ草は甘い香りがするんだが、その草を引っ張ると次第に臭いが臭くなっていくんだ。だからそれを抜いたらすぐに袋でしばって臭いを外に出さないようにするんだ。」

「うわあ。カンシユウ草って甘く臭い草ってわけか？」

「だ、そうだ。ケル。頑張れよ。ニヤニヤ」

「う、むむう。ま、まあ抜く前は甘い臭いなわけだから大丈夫だろう。多分……。ご主人、何でニヤニヤしているのだ？」

「他人の不幸は蜜の味って昔から言うじゃないか？いや、他犬か？」「それはあんまりではないか！？ご主人！それに私はもう犬ではないぞー！」

「冗談だつて。それにその姿なら人並みの鼻なんだろう？なら大丈夫じゃないか？誰でもわかるぐらいの臭いのはずだしな。なあ、ヴァン。」

「そうだな。近くに来れば誰でもわかるぐらいの臭いだから安心しろ。」

「そ、そうか。それならいいが・・・。」

ちよつとやる気戻ってきたか？報酬としては銀9枚か。これってどのくらいの価値なんだろうか。

「銀9枚ってどのくらいの価値があるんだ？」

「そうだな。1日過ごす食事代が銅50枚程度だな。宿代が1日朝、夕方の飯代つきで銀1枚ぐらいかな？」

なるほど。銀1枚1万円ってところか？でも、9枚あれば1日は簡単に過ごせるわけだな。

「OK。わかった。ありがとう。」

「お、おう。OK？」

あ、こつちではOKなんて通じるわけなかった。あつちでは普通に使ってたからな。

「ああ、OKってのは了解みたいなものだ。気にするな。」

「あ、ああ。わかった。お、お〜け〜。」

いや、わざわざ合わせてくれなくてもいいんだけど・・・。
ちよつと苦笑いしていると

「ご主人。向こうでの言葉が抜けきつてないみたいだな。まあ、私は向こうでは人語は喋ってないからそういうったへマはしないがな。」

なんかふんぞり返ってるやつがいるんだが・・・。お仕置きだな。

「《風よ》」

ブオツ！

「フンギャツ！」

上から強い風をケルに当たてケルを地面に叩きつけてやった。

「フンツ。」

「おゝい。大丈夫か？ケル。」

「そいつは放っておいて依頼を受けようぜ。この紙を受付まで持っていけばいいのか？」

「あ、ああ。それでいいのだが、なんだか周りからの視線が痛いんだが……。」

たしかに……。ここではやらないほうがよかったか？済んだことは仕方ないさ。

と、心の中で思いながら受付まで持って行ったが受付嬢もなんだが苦笑いというか若干引いているな。

「すみません。この依頼を受けたいんですけど。」

「あ……はい。かしこまりました。えーと、ウルフとゴブリンの討伐にカンシユウ草の採取ですね。カンシユウ草はこちらの袋をご利用下さい。」

袋も渡してくれるのか。臭いを耐えながら戻るのも勘弁だな……。

「わかりました。それじゃ、行くかヴァン。」

「ああ、わかったが……ケルはどうする？まだ倒れてるぞ？」

まだ倒れてるのかよ？しょうがないな。

「お〜い。おきろ〜。」

と、言いつつ額にデコピンかました。朝よりも強めに

「ふぬお〜！ご、ご主人朝よりも痛いのだが……。」

「そりゃそうだ。朝よりも強めにデコピンしたんだからな。」

「本当にデコピンはやめてくれ！これ地味に痛いのだぞ！」

俺のデコピン強すぎじゃね？

「わかったよ。今度からはもっと軽めにやるから。」

「軽めも何もやめてほしいのだが。」

こんな面白いことそうそうやめねえよ。

「ん？ご主人。もう依頼は受けたのか？」

「ああ、お前が寝ている間にな。」

「それは、ご主人がこんなところで魔法使ってくるからではないか？」

「あはは……。あれについては反省してるさ。もうしないって。」

さすがにこんなに痛い視線を受けてまでしようとは思わないさ。

「そうか？それなら私は嬉しいのだが、2つの意味で……。」

「もちろんお前が何かしでかしたら俺は賤という体罰を受けてもらうがな。」

「いや、だからそれをやめてほしいのだが……。」

「そろそろ行くぞ？ここからそう距離はないが3つも依頼を受けたのだからもしかしたら日暮れまでかかるかもしれないからな。」

それもそうか。善は急げというしな。

「それもそうだな。よし、行くか。」

俺たちはギルドを後にして、昨日の森へ向かった。

所変わって森の中。そんな中で俺たちは

「なあ。」

「なんだ？」

「俺たち森の中に入ってまだそんなに経ってないよな？」

「そうだな。」

「じゃあ、なんでこんなにモンスターがいるんだよ！昨日は5匹しかいなかったじゃないか！」

俺たちの前にいるのはウルフが10匹に加え何か青色のしたウルフ亜種？的なモンスターが5匹いる。

俺たち3人でモンスター15匹か！？まだ戦闘1回しかしてないのにこれは酷すぎじゃね？

「この数は珍しくないがこのアイスウルフは珍しいな。」

「そのアイスウルフって青色のウルフのことか？」

「ああ、そうだ。こいつは氷のブレスを吐いてくる。当たれば凍傷を起こして動きが鈍くなるから気をつける。」

「わかった。万が一当たっても俺が炎の魔法で暖めてやるからな。」

「ご主人。そのときは火傷になるのではないか？」

「冗談だよ。じょくだん。」

「ご主人の本気と冗談の境がわからぬ……。」

さすがにこれはやんねえよ……。

「さて、話しはそれまでにしておいてそろそろ来るぞ。」

マジか。じゃあ一発強い魔法でも撃つてみますか？

「俺が先制で魔法を撃つ。《荒れ狂う炎よ。踊り狂え。フレアダンス!》」

ゴオウツ!

炎の魔法をモンスター目掛けて放った。イメージは敵の周りを炎で囲み一気に収縮させて爆発させる。

ボガアアン!

全滅はできなく何匹か飛んで生き延びた。すげえ跳躍力……。

「丁度3匹出てきたか。1体ずつ相手するぞ! コースケはアイスウルフを頼む。」

うえっ!? 俺!?

「ちよっ! 待つて! 何で俺!？」

「アイスウルフはブレスを吐くから接近戦では不利だ。魔法が使えるコースケの方が有利なんだ。頼んだぞ!」

「私はこの体で戦ったことがないから経験地を稼がないとな。」

RPGかよ。レベルはないがまあ、確かに経験地だよな。

「まずは俺から行くぞ！はあっ！」

ヴァンが身の丈ほどある大剣を横薙ぎに払った。しかし、ウルフはジャンプで避けた。

「ふんっ！」

ブシヤアッ！

ヴァンが上空に跳んでいるウルフ目掛けて剣を突きつけた。突きつけた剣は正確に喉に刺さりウルフは声も上げずに死んだ。

「すげえっ。あんなでかい剣を軽々と……。」

「何ボサツとしている！そっちに来ているぞ！」

「うおっと！」

「ふんっ。」

かなり近くに近づいてたのに気づかなかった。ヴァンの声が無かったら危なかったぜ。

俺は危なげに避けたけどケルのやつ楽勝で避けやがる。

「あ、ご主人は魔法があるからいいのだが、私は何も武器を持っていないではないか！？どうすればいいのだ！？」

「いや、俺も素手はちよつと怖いわ。お前は獣人特有の筋力があるじゃないか？それでなんとか頑張れ！」

まあ、ケルはなんとかなるだろうが俺は魔法であいつを倒すしかないよな。素手怖い……。

「くそっ！《風よ。吹き荒れる！》」

なんか、風魔法のワンパターンな気がする。次は水でもやってみるか。

「《圧縮されし水よ。敵を貫け。スプレッド！》」

水の魔法も使い方によっては凶悪だな。心臓目掛けて放ったんだけどおよそ10cmぐらいの穴が出来てるんだけど。もちろん死んでいる。

ケルの方はどうなってるのか見てみると、ケルはスピードを活かしてウルフの攻撃を避けている。ウルフの噛み付きを避けた瞬間に首を掴んだ。

ゴキヤツ！

骨の折れる音がしてウルフの首を落とすとウルフは力なく倒れた。

「やるじゃないか。ケル。」

「ご主人に褒められるなんて・・・、明日は雨ダブオツ！」

くだらんことをのたまったからソバットをくれてやった。首に・・・。

「何をすご主人！？危うくムチウチになるところではないか!？」

「いや、その程度で済むような音だったか？とりあえずケルに回復魔法してやってくれないか？コースケ。」

え？回復魔法？マジでそんな便利なものがあるんかい？

「回復魔法って存在するんだ。この世界。ってか俺使えるの?」
「全属性が使えるなら回復魔法も使えるんじゃないかな?って思っ
てね。」

ああ、なるほど。じゃあ、使ってみるか。

「《癒しの水よ。ヒール。》」

バシヤアツ!

なんと、ケルの頭の上から水が大量に落ちてきた。

「……ご主人。これは何の真似だ?嫌がらせか?」

こわっ!俯いてて表情はわからないが声がめちゃくちゃ低い。って
かオーラが黒い……。

「いや、待て待て。今回はマジで回復魔法使おうとしたんだぞ!俺
は悪くないはずだ!」

「なぜ癒しなのに水なんだ?普通光じゃないか?水の詠唱を加えた
から水が出てきたのではないか?」

んな!?こつちの世界は水は癒しには属さないのか?いや、一応癒
しの単語も入れたから回復魔法にはなるのか。
だけど、マジで水が出てくるとは思わなかった……。

「ワ、ワリイ……ケル。まさか本当に水が出てくるとは思わなく
て。ごめん。」

「ワザとじゃないのだな。なら許す。それに首は治ったしな。」

おお。一応治るものは治るんだな。

「な、ちゃんと治したんだし。いいじゃねえか。」

「上から水が落ちてくるなんて何の罰ゲームかと思っただが、あれで治るなんてやっぱりご主人は規格外ダフンツ！」

禁句ワードを喋る奴には愛の拳骨だ。

「痛いではないか！？ご主人！」

「てめえが規格外つて言うからだろ！？」

「ま、まあまあ。その辺にしとこうか。敵は全員倒したわけだし。」

「そうだね。終わったわけだし討伐部位を取ろうぜ。」

「そうだな。ちなみに依頼を受けているときは討伐部位の報酬はもらえないからな。」

「へえ。そうなのか。まあ、依頼を受けるほうがおいしいな。」

さて、全部取り終えたところで少し腹減ったな。

「なあ、ここらで飯にしないか？」

「そうだな。それじゃ、そろそろ飯にするか。」

というわけで只今お昼を食べているのだが、そういえば気になることがあったな。

「なあ。この世界って風呂ってあるのか？」

昨日風呂入らずにそのまま寝ちゃったからな。今日は風呂にはいつてリフレッシュしたいところだな。

「ふる？ふるとはなんだ？」

・・・はい？マジかい。だけど体を洗う習慣はあるはず！

「そうだな。体を水で洗うってことだな。正確にはお湯を体につけるんだ。」

「体を洗うのはあるが、お湯に体をつけるのは知らないな。というか考えたことないな。」

なるほど。じゃあ、今度泉とか池があったら教えるか。

「そっか。了解。」

「ん？ご主人。何かがこっちに向かってきてるぞ。」

「本当か？それ。何人ぐらいかわかるか？」

「数は先ほどよりも多くはないな。」

さっきのに比べてってことは10前後か？

「わかった。すぐに戦闘準備するぞ。」

「ああ。」

ガサガサッ

「来るぞ。」

お出ましたな。っと、こいつは・・・ゴブリンか？

「ヴァン。こいつらってゴブリンか？」

「ああ、そうだ。よくわかったな。」

まあ、ゲームによく出る姿にすんげえ似てるからな・・・。

「10体か。先ほどのウルフよりは断然楽だが、あいつらが手に持つてる棍棒には気をつけるよ。ウルフとはリーチが違うからな。」

まあ、当たらなければいいわけだしな。なんか俺たちの戦闘っていつも数が多い気がするんだけどな。ま、元から群れで行動してるわけだしそこはやむなしってことで。

「じゃ、さっきと同じで俺が魔法をぶつ放す！《雷よ鳴り響け！ライトニング》」

俺の手のひらから放たれた雷は敵1体ではなく、放射されて全体に行き渡って全滅した。

「・・・あゝ。なんというか拍子抜け？これはこれで良しということだ！」

「なあ、ヴァン殿。私たちは戦闘に参加する必要はないのでは？」

「俺もそんな感じがしてきた。」

やべえ。このままだとこれからの戦闘俺だけになっちまうかも！？

「いやいや、相手が雑魚だからだよ！うん。もつと強い敵が出てきたら俺だけだと絶対どうにもならないって。俺結構二人の力当てにしてるんだから。」

「ほ、本当か？ご主人。そうだよな。ご主人には私がいないとダメだよな。」

「そうか？コースケは魔法が強みだからな。前衛は任せてくれ。」

ヴァンはうれしいこと言ってくれるが、ケルの言い方だとまるで俺がケルがいないとダメ人間みたいじゃねえか。

「そうだよ。それと早くとどめさそうぜ。多分何体かは痺れてるだけかもしれないしな。」

「そうだな。それじゃあ、今のうちにトドメを刺しておくか。」

う、そうだったな。あまり見たくはないけど慣れるためには我慢だ。

「そうだ。ケル、お前は動物の姿になってカンシユウ草が周りにないか臭いを見つけてくれないか？」

「了解した。では、トランスフォーム！」

ぶっ！こいつ何言ってるんだよ！そんな掛け声いらねえだろ！

「おい！何掛け声なんかつけてんだよ！？」

「気持ちだ気持ち！掛け声があるとカツコいいではないか？それとも変身！のほうがいいか？」

「どっちも良くねえよ！掛け声なんかつけたら次からは変身する度に変態っていうぞ！二つの意味で。」

「んなつ！なぜ変態と呼ばれなければならないのだ！」

「毎回変身って言うたびに全裸になってたら冷たい視線を浴びることになるぞ？そういう意味では変態じゃないか？」

「もう掛け声はつけられないから勘弁してください！」

それでいいんだよ。全く無駄なことしてる間に探せばいいのに。

「ん？ご主人。こっちに甘い臭いがするぞ。」

お、早速見つけたか。

「それじゃあ、行ってみますか？とりあえずケルが着替えてからだ

な。」

ケルが臭うって言うってた場所まで行ってみたが確かになんか甘い臭いがするな。

「お、あつたぞ。これがカンシユウ草だ。引き抜くから袋の準備をしてくれ。」

「あいよ。何時でもいいよ。」

「よし。これで完了だ。っと、何かがかつちに来てるみたいだ。」

ん？そんな気配はしないが何か来てるからには警戒しないとな。

「またゴブリンか……。って、後ろにいるデカイのは何だよ!？」

明らかにゴブリンじゃないのが1匹混じってるんだけど？しかもでけえ。

「あれはオーガだな。気を引き締めないと死ぬぞ。ちなみにランクCだ。単体でな。」

いきなり単体ランクCがきました！やべえんじゃないのか!？

「くそつ！俺とケルは雑魚を倒す。雑魚を倒している間はヴァンはオーガを頼む。俺たちじゃああいつの力がどれくらいあるのかわからないからな!」

「了解した。」

「ああ、いいぞ。任せておけ。」

ここは定石の俺が魔法をぶっ放して戦闘開始だ!

「《火よ！やつらにぶち当たり爆発しろ！フレアボム！》」

ボガアアアン

「雑魚が粉微塵になったではないか！詠唱適当すぎだしあとはオーガだけではないか！」

「ま、まあそう言うなよ。結果オーライってやつだよ。」

「よくわからんが丁度いい。2人で倒してみたらどうだ？俺は1人でも倒せるから2人の実力を知りたいからな。」

え？俺らにこのデカブツを倒せというのか？

「え？マジで！？俺らにこいつを倒せるのか！？」

「ゴブリンやウルフの群れを1人で倒せるならこいつも倒せる实力はあるはずだ。今回はコースケは援護に徹底してケルでトドメを任せる方向でいくか。コースケだと一撃で倒せそうだしな……。」

「うっ……。りょくかい。んじゃ、行くぞケル！」

「任せろ！ご主人！」

まずは相手の目を潰してみるか。

「ケル！目を潰れ！《炸裂しろ閃光よ！シャイニングスタン！》」

バシィッ

「グウオオオオッ！」

「よし、行けケル！」

「ハアアアアッ！」

ドスッ

「……手ごたえなし！」

「おおい！腹にパンチ食らわしても意味ないだろうが！もつと頭使えよ！てめえの頭は脳筋でできてんのか！？鳩尾狙うとか喉を狙うなりなんなりしろよ！」

「いきなりだったから何も考えなかったのだ！だったら喧嘩のセオリーで腹に一発食らわすのが普通ではないか！？」

「こいつはモンスターだぞ！？んなもん通用するかよ！？大体こんな相手素手で戦えるか！」

じゃあ、あれ試してみるか。

「ケル！熱かったらすぐに言えよ！《炎よ！彼の者に力を与えよ！フレアエンチャント！》」

ポウツ

「チョツ！ご主人！相手が違っ！って熱くない……。」

「なんとかかいったか。もしかしたら魔法でパワーアップとかできねえかな？って思ってた。試してみたら意外とイケルみたいだな。」

「もし間違ってたらどうするつもりだったのだ！？」

「安心しろよ。俺には回復魔法もあるんだぞ。水で消しつつ回復できるなんて1石2鳥じゃないか？」

「いや、それは1石2鳥とは言わないぞ！」

とにかく、こっちはパワーアップしたわけで仕切りなおしだ！

「「ごちゃごちゃ言わずに行くぞ！」」

「了解した！」

「行くぞ！《風よ切り裂け！ウィンドエッジ！》」

ズバツ

「グウオツ！」

「もらった！必殺！昇竜拳！」

ボグツ！

パクリネタ使うんじゃないやねえ〜！やつが仰向けに倒れた今がチャンスか？

「ケル！今がチャンスだ！《彼の者に力を与えよ！アイスエンチャント！》」

ケルの手に氷を纏わせ先端が尖ってる魔法を施した。

「どうわ！ビツクリするではないか！ご主人！前もって言ってくれないと心臓に悪いぞ！？これ！」

「いいからそれでやつの心臓を刺せ！」

「了解だ。食らえ！」

ドスツ

「グオオオウツ・・・。」

倒したか？動く気配はないしこれ倒したよね？

「ふう〜。マジで緊張するわ〜。」

「そうだな。まさか体があんなに硬いとは思わなかったぞ。」

そもそもあんなデカブツに素手で挑むこと自体間違いじゃね？

「というか、ヴァンがケルでトドメ刺せっていうのが間違ってるんじゃないか？」

「むう。確かに素手であいつを倒すのは無理があったな。武器を持っていないのを失念していた。」

まあ、これで3つのクエストは完了したわけだ。ということ、戻るか。にしても、疲れた。

「さて、ギルドにいったら報酬をもらいに行くか。」

「そうだな。その後武器でも揃えようぜ。さすがに俺たち素手+防御力皆無は怖い・・・。」

「ランク低い相手なら装備なくてもいけると思ったんだがまさかオーガが出てくるとは思わなくてな。」

そうなのか。俺らの中にモンスターを引き寄せる体質を持っているのか？勘弁してほしいね、これ。

「よし、報酬をもらったことだし装備を整えにいくか。」

「待ってました！武器は男の憧れだよな。どんな種類があるんだろっ。」

「そうだな。向こうでは武器自体持つのが禁止されてるからな。」

「そうなのか。そっちはよほど平和だったんだな。」

そりゃあね。モンスターなんて空想の類だったからな。

「モンスターはいなかったからね。こいつも元はかわいい動物だっ

「ただだから。」

「まあ昔の姿はモンスターの首なんて噛み千切れるはずがないからな。」

でも金輪際首を噛み千切るなんて芸当はやめてほしいんだけどね。

5話・ギルドで一攫千金？無理だろ（後書き）

浩介「さて、作者よ。何か言い訳はあるか？」

えっと、これはですね。色々と書くことは頭の中に浮かんでいたんですけどいざ書くころと思ったたらあれ？こんなんじゃないかねえと書き直しの連続でして……。その後にはxboxのモンハンが出るじゃないですか。そっこのほうにフラツとつい……。

ケル「やれやれ。行き当たりというのは作者のことではないか。」

そうです。行き当たりばつたりというのは作者のことです！

浩介「威張るんじゃない！」

ゴフツ！……鳩尾は勘弁……。

ヴァン「全く。次回のさわりの部分だけ説明でもしようか。今回はコースケとヴァンの武器が決まるぞ。大体は決まっているがあの武器にしたいという要望があればそちらにするらしいということだ。

よろしく頼むな。」

ちよっ……私の台詞……。

6話・武器にも色々あるんだな…（前書き）

長らくお待たせして申し訳ありません！

他の方々の小説を読ませていただき勉強しようと思ったのですが読めば読むほど執筆が難しいと感じて挫折しかかってました…；

最近やっとやる気を出し始めましたのでこれからも書き続けたいと思います！

更新頻度はバラバラになります但最低でも月1出せるように頑張りますのでこれからもよろしくお願いしますm（　　）m

6話・武器にも色々あるんだな…

さてと、俺たちは武器屋に来たはいいんだけど俺武器なんて見たことも触ったこともないんだぜ？

「そつえばケルは武器何にするつもりなんだ？」

「いや、特に考えてなかったな。まあ、元から身体能力が高いから何でも使いこなせるのではないか？マイナーな物があればそれで行こうと考えてはいるが。」

ふうん。まあ、俺たちは武器なんて触ったことないわけだし…。ケルは武器はあつたほうがいいとはいえ、俺は魔法が使えるからすぐに武器がいるというわけではないな。魔法の邪魔にならないやつにでもするかな？

「コースケはどういうスタイルでいきたいんだ？」

「へ？スタイル？」

「ああ、コースケは魔法が強みだろ？魔法一本でいくなら杖とかがいいな。」

「は？杖？なんで？杖もつたら自然と威力が高くなるとかそんなRPG的な追加効果なんてものがあるのか？」

「言ってる意味はわからんが威力が高くなるとかあるな。杖というより杖の先端についてる水晶が、だけどな。ついてる水晶の色とランクによって付加価値が違うけどな。」

「なるほど。じゃあ、その水晶さえあれば剣とかにつけても効果はあるんだよな？」

「そうだが、水晶を媒介にして効果を上げるわけだから水晶の先から魔法が発動するわけで剣の先端につけるわけにはいかないだろう？柄の辺りに付けても剣先を上に向けなきゃ変な方向に向かったりとかな。」

まあ、熟練してるやつなら関係ないが。」

なるほど。水晶はメリットがあるけどデメリットもあるわけだな。

「じゃあ、水晶を使わなければ剣とかの接近戦と魔法の遠距離もできるわけだな。」

「そういうことだ。もうひとつは、これはあまりお勧めはできないんだが銃を使った遠距離のみだな。」

「え？銃!？」

「ん？なんだ？そつちではなかったのか？」

「いやいや！あったよ。むしろこつちではそれがほとんど主流だったしな。武器としては。」

こんなところで銃なんて名前を聞くことになるなんて…。ていうかそれがなんでお勧めできないんだ？」

「ああ、実は銃は遠距離から簡単に攻撃できるんだがデメリットの方が多いんだ。一つ目が維持費が掛かるんだ。弾もタダではないしな。二つ目としては味方への誤射だな。三つ目としてこれが一番だけどな。殺傷能力が低いんだ。いや、これもランクの高い物を買え

ば済む話なんだが今のところ予算がな……。ランクの低い物だと俺たち人は倒せるがモンスター相手だと急所を撃たない限りは一撃なんてことはできないからな……。」

そうか。こつちにはモンスターもいるわけだし魔法があるからな。銃はむしろ邪魔なんだな……。」

「じゃあ、ランクの高い銃を買えば解決するわけなんだよな!？」
だからといってあきらめるわけがないじゃん!

「ま、まあそうだが。今の予算では全くといっていいほど足りないぞ?」

「大丈夫!俺は一応素手でも魔法があればなんとかなるわけだし。金が貯まるまでは我慢できるさ!」

「ご主人は何も買わないのか?」

「ああ。金が貯まるまではな。ん?お前はそれにしたのか?」

「ああ。これはあまり見かけないし私にピッタリではないか?」

ケルが買った武器はクローと呼ばれている武器だ。手の甲に鉤爪がそれぞれ3本ずつ伸びている。

「これなら、素手とそれほど変わらないし、爪のほうは収納できるみたいでわざわざ外す必要もないみたいだぞ?」

ほう、爪が肘関節まで戻っていつて特に邪魔になる感じではないな。

腕が万が一怪我をしないようにプロテクターが肘辺りまでついているのか。

「それと、ご主人たちが話している間に一つ細工をしてもらったのだ。」

「ん？細工とはなんだ？クローはそれ以外機能はないはずだよな？」

「実は手首からナイフが出る仕掛けを作ってもらったのだ。これをモンスターの急所に向けて打ち出せば一撃だな。」

ほう。某暗殺ゲームの暗器か。よく考えたなケルのやつ。

「それでこの武器を買って細工をしてもらったときに金が思いのほか掛かってしまつて今回の報酬の3分の2が消えてしまったのだ。それでご主人が買えるだけの予算はなくなつてしまったのだ。これは失敗したな。アハハハハ！」

「そうか。まあそれはしょうがないよな。金がないんじゃないかあ何も買えないもんな。別にお前が悪いわけじゃないもんな！」

「な、なあご主人。何か怒つてないか？」

「いやあ。別に何も怒つてないさ。ただちょっと無計画なんじゃないのかな？つて思つただけさ。知識だけあつて経験はないわけだからまあ仕方ないと思うよ？」

そうだ。今思いついたんだが、銃を買つた祝いにおねがしいことがあるんだけどねえ。いや、別に難しいことを頼むわけではないけど頭にリングを置いて棒立ちしてくれるだけでいいよ。」

「それは私に死ねと!？」

「ハハハ。俺が外すと思ってるのか？サーカスとかでよくナイフを投げて全部命中してるじゃないか。

だったら俺にも出来るはずだ！安心しろ。」

俺はケルの肩に手を乗せてサムズアップしてみせると

「安心できるか！あればぶっつけ本番で成功してるわけじゃないかな！？」

ちゃんと練習を重ねてるからできる技なんだぞ!？」

お互いに冗談を（ケルはマジだろうが）言い合っていると

「こんなところで漫才なんかせずつきさど店をでるぞ。どうせ明日も依頼をこなさなければならんだからな。」

確かに武器を買ったから少し金が心もとないだろうしな

「あゝ。それもそうだな。ほら、行くぞケル。」

「あつ。ってちょっと待て。さっきのは冗談だよな？な？まさかあんな危ない真似をするわけないよな？」

「何を言っているんだ？お前は？さつさと行くぞ。今日は汗も流したいしな。」

俺の新しい武器のために金を稼がないとな！

「なあ、ご主人！何か言ってくれええ！！怖いから！そのスルーは

怖いから!」!

6話・武器にも色々あるんだな〜（後書き）

本当に申し訳ありませんでした！前書きにも謝罪したのですがどうしても続きを書けなくて…。

自分が書いた小説を読み直して何だか書き方が変だな〜と思って書き直しを繰り返して一時期自分には向いてないんじゃないのか？と思いついて挫折しました。

でも、自分の考えた小説を書いてみたいという気持ちは消えなくてもう少し頑張ってみようと思います！温かく見守ってやってくださいm) —————) m

ところで、他の方々のあとがきでちよくちよくPVとやらを聞いてどうやって見れるのだろうか？と思って探してみte驚きました！

なんと、PVが2000を越えているではないかと！

こんなグダグダな小説を読んでくださって本当にありがとうございます。

今後とも更新をなるべく途絶えないように頑張っていきたいと思えますのでどうかよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8757/>

何がどうなってこうなった？

2011年10月7日08時27分発行